

観音菩薩—大乘仏教における実践の理念とその実像—

九州大学 阿 理生

近年、観音菩薩〔以下観音と略称〕に関する研究はにわかに活況を呈している。それらの研究の主眼は、観音の原語の特定と変遷の解明に置かれている。『法華経』「普門品」に叙述される観音の威力（prabhāva）に触れることはあっても、その威力の背景にある社会的活動に踏み込んだ研究は皆無である。さて、大乘仏教の発声について『八千頌般若』は、今日の研究者に有力な情報をもたらす。

（cf. 拙稿『『八千頌般若』の発生基盤』印仏研 59-2、平成 23 年 3 月）

海洋と関係の深い観音の存在も、大乘仏教発生の時期と重なっているように思われる。観音についてまとまった記述をなす「普門品」や『華嚴経』「入法界品」を資料として、大乘菩薩としての観音の活動・実践を究明し、初期大乘仏教の実践理念とその実像の解明に資したいと思う。

まず「普門品」梵文に説かれている衆生の諸苦難を列挙する。続いて、観音の名号が具える威力について検討する。最後に観音の原語について検討する。